教師の秘伝

活用方法

『教師の秘伝』を使って、これからの時代に必要な資質・能力を育成する教育を実践する

～思考力を基盤にした汎用的な能力を育成するアクティブ・ラーニングの実現に向けて～

『教師の秘伝』を作成した目的は、「どこの学校でもできる方法」で、新しい時代に求められる教育をするためです。特別な条件を整えた学校だけができるというものではありません。これからの時代に必要な資質・能力を育成する教育は、人と人とのよりよいかかわり方（対話を中心にした相互作用）が最も重要になります。この秘伝を活用して、将来を見据えた教育の基盤づくりをして、深い学びのあるアクティブ・ラーニングを実践して、教育のすばらしさを実感してほしいと思います。

平成２８年１月２２日研究発表会

川崎市立川崎小学校

『教師の秘伝』の役割

校長のリーダーシップとチーム学校

児童の資質・能力を育成していくためには、児童に毎年育成する能力を、積み重ねていくことが不可欠です。学校の中で、力のある一部の先生が、よい教育を実践しているだけでは、児童に資質・能力を積み重ねていくことはできません。「あの先生はよかった。」、「この先生ははずれだった。」となってしまいます。

学校として共通性と一貫性のある手立てを提示すると「教師の個性の発揮を妨げてしまう、教師特有の技術や技能が生かせなくなる」などの理由で賛同を得られないこともあります。

しかし、それを理由に、教師が自分なりのやり方でバラバラの実践をしていたら、教師の力量の差で、児童は大きな影響を受けてしまいます。特にこれからの時代に必要な資質・能力の育成も積み重ねることはできません。また、組織として、教育に責任を持つということもできません。何よりも、そこにはチーム学校の存在も機能性もありません。

これからの時代の教育は、「何を知ったか」だけでなく、「何をできるようになったか」が求められ、資質・能力の育成が重要になります。繰り返しになりますが、資質・能力は、１時間の授業や１つの単元や１年間という短期間で養えるものではありません。年々積み重ねていくことで可能になるものです。

これからの教育は、学校として、どのような資質・能力を育成するのか明確にするとともに、その育成のためにはどのような学び方が有効なのか、具体的な手立てを考え、共通性と一貫性のある取組をすることが重要です。これを可能にするのが、校長のリーダーシップです。そして、この実践を通して、チーム学校が自然に成立していくのではないかと思います。

具体的な取組の方向性

深い学びのあるアクティブ・ラーニング（以下ＡＬ）を実現する方法は、いろいろあります。例えば、優れた先生は、得意の教科ばかりでなく、全ての教科でよい授業ができます。それは、子ども達に汎用的な能力（資質・能力）を養っているからです。その先生の方法を、明らかにして、学校として共通性と一貫性のある取組をするという方法です。児童に汎用的な能力が年々積み重ねられ、すばらしい教育ができる学校になることと思います。

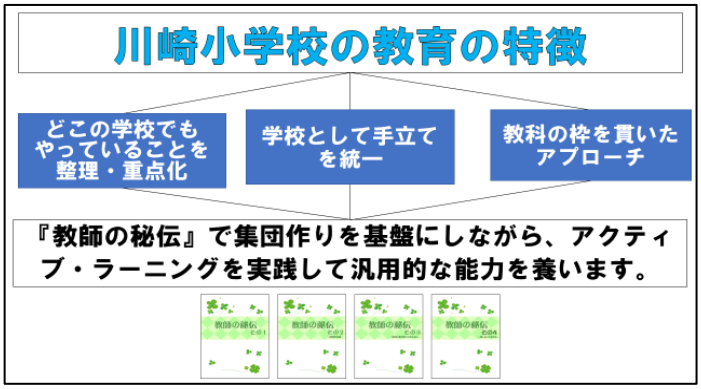
また、みんなで効果的だなと思う方法を出し合い、共通性と一貫性のある取組をするという方法もあります。

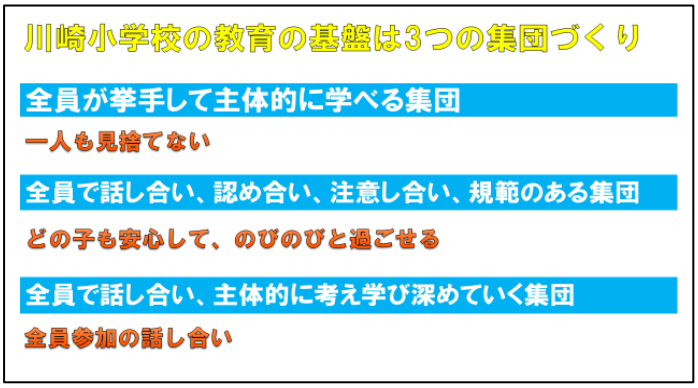
しかし、そのような条件に当てはまらない学校もあります。でも、深い学びのあるＡＬを実現したいと考えている先生もいらっしゃることと思います。

そのような場合は、川崎小学校の『教師の秘伝』を活用して、全校で一致した取組をすると、深い学びのあるＡＬを可能にする基盤を作ることができます。

共通性と一貫性のある取組と教師の個性や能力

『教師の秘伝』を活用して、共通性と一貫性のある取組をしても、教育は人と人とのふれ合いのもとに行われるので、教師の個性や能力が発揮されることを妨げることはありません。共通性と一貫性のある方法をとるということは、ある程度の制約はありますが、『教師の秘伝』はあくまでも学校としての基本です。これを達成できた人は、『教師の秘伝』の考え方に即しながら、教師自身の個性を発揮した、教育の実践をできるようにしていくことが、最終的なねらいなのです。





なぜ、アクティブ・ラーニング（ＡＬ）なのか

教師の秘伝を活用しての教育は、集団を機能させていくことで教育を充実させようとするものです。つまり、人と人とのかかわりを通して学ぶことを基本にしているということです。教育の現場では、「学習に主体的に取り組む。」「課題解決力を養う。」「思考力・判断力を養う。」、「表現力を養う。」、「コミュニケーション能力を養う。」、「社会性を発達させる。」「道徳心を養う。」などをめざして多種多様な実践が行われてきました。これらは、どこの学校でも目指してきたことだと思います。同様に教師の秘伝でも、これらの技能や能力、倫理観を養うことを目指しています。毎日の学習の指導においても、学習の狙い達成のみではなく、思いやり、助け合い、人とかかわる力、倫理観、思考力・判断力・表現力・創造力、人と協働して問題解決する力などを積み重ねていくことをめざしています。これがアクティブ・ラーニングの考え方と一致していたということです。アクティブ・ラーニングは、対話による相互作用を通して、汎用的な能力を養うものです。対話による相互作用は、集団を機能させることと一致、汎用的な能力は、前述した養おうとしている力と一致しています。このことから、川崎小学校で活用している「教師の秘伝」は、アクティブ・ラーニングにつながっていくものだと判断しました。そして、これからの時代に必要な資質・能力を育成する学習としてアクティブ・ラーニングが諮問されたので、アクティブ・ラーニングという概念を使った方が伝わりやすいと考え、川崎小学校の教育もアクティブ・ラーニングにしました。

チーム学校の成立

教師全員が同じ方向を向いて取り組み始めると、共通の話題が多くなり、自然に教師間の交流が活性化してきます。取組が進むにつれて、効果が目に見えて出てくるので、教師が自信を持って実践できるようになります。そして、困ったことがあると、教師集団の共通の問題として、みんなで解決しようとする助け合いの雰囲気も生まれてきます。意思疎通がたいへんよくできるようになります。力のある人が「教えてあげる」から、みんなで「学んでいく」に教師集団が変容し、チーム学校が成立していきます。

短期間での変容

学校全体で年度当初から教師の秘伝を活用した取組を始めると、短期間で「子どもが積極的に発言するようになる。」、「注意し合うようになる。」、「よく話を聴くようになる。」、「助け合うようになる。」など、多くの変容が見られるようになり、学校全体の雰囲気もよくなってきます。

年度当初の研究授業

教師の秘伝を活用した取組を継続していれば、学級編成後の新しいクラスを担任しても、学び方や学級集団づくりに共通性があるので、これまで通りの学習の進め方ができます。そして、短期間で、次のステップを目指すことができるようになります。子どもの資質・能力が育っているので、４月でも抵抗なく公開授業を行うことができます。

リーダーの育成

この取組を始めると、短期間で秘伝の方法を習得して、すばらしい実践をする教師が出てきます。このような教師が、年令・経験に関係なく、自然にリーダーとして、周囲に働きかけ、取組を充実させるようになります。

経験豊富な人は、問題対応等も慣れているので、リーダーになるべきだという考え方もあります。しかし、『教師の秘伝』を活用しての取組は、問題が起こらないようにするための積極的なものであり、問題が起こったときどう対応するかという消極的なものではありません。前向きな視点からリーダーを想定し、実力のあるリーダーが学校運営の中核になっていくことが、チーム学校として機能することにつながります。

初任者の育成

一貫性と共通性のある取組が定着してくると、児童の資質・能力が育成されて学び方が定着してくるので、初任者が担任をしても、学級集団として学ぶ力は備えています。そのため、初任者として、「どうやったら児童が発言するのか」、「どうやったら授業に集中するのか」、「どうやったら思いやりを持って助け合いができるのか」などの悩みは、ほとんどなくなります。このような学級集団と児童の良さをどう生かしていけるかが、初任者の課題となります。

初任者にとって一から学級づくりをしていないというマイナス面はありますが、なぜこのようなよい集団になっているのか、大切なことは何かなど、毎日の実践から学ぶことができます。そして、学級集団の良さを維持することが初任者の力量を高めていくことになります。

一貫性と共通性のある取組をしているので、どの教師に聞いても、初任者に対して的確な助言がなされます。初任者にとっては、周囲の同僚とのかかわりで充実した学びが可能になります。

また、初任者が授業を公開しても、子ども達に汎用的な能力の積み重ねがあるので、よい評価がなされることも、この取組の特徴となります。

業務の効率化の重要性

今日の学校は、社会の要請に基づく取組が、どんどん入ってきて、多忙化しています。本来なら、保護者がやるべきこと、保護者に要求するべきことも学校は抱えざるを得なくなっています。本当に多忙であると感じている教師がほとんどではないかと思います。しかし、これを嘆くだけでは何も解決しません。ではどうすればよいのでしょうか。

これらの問題や要求に、個別にひとつひとつ対応していては、時間や労力も全て奪われ、振り回されてしまい、よい教育の実践どころではありません。

取り組みを充実させるために川崎小学校では

業務の効率化を図る → **子どもと向き合う時間を充実させるため。**

- 必要な会議に絞り込む。（その他は打ち合わせ）
- 反省会は当日終わらせる。（運動会・卒業式他）
- 指導案は単元計画にして簡略化する。（立派な指導案を作っても‥）
- 文書・冊子は極力少なくする。（形にとらわれない）
- 新たに何かを入れるときは、何かをやめる。（時間・労力対効果）

教育そのものに時間と労力を注げるようにして、形だけのものはやらないことにしたり、簡単に終わらせたりすることも必要なのです。

また、基本に立ち返ることも大切です。子どもに向き合い、よりよい教育の実践ができれば、全て解決できるのではないでしょうか。教育そのものをよくする具体的な方法を考え、共通性と一貫性のある取組をすることから、道は開けてくるのではないかと思います。

業務の効率化と教師の力量の向上

教師は、学校生活だけではなく、家庭生活も大切にしながら、教師自身の社会経験を豊かにすることも必要です。そして、社会にアンテナを張り、実社会や実生活にかかわりの深い学習を目指してほしいと思います。学習指導要領の内容を深く理解するとともに、自分なりの思いを持って単元を構成できるようにして、対話を中心にした相互作用が充実したアクティブ・ラーニングを実現してほしいと思います。

【学校として「教師の秘伝」を活用する場合】

『教師の秘伝』活用の手順

1．次年度の取組で「教師の秘伝」に基づいて教育を実践していくことを確認します。（年度末）

■これからの時代に必要な資質・能力（汎用的に能力）を具体的に示します。（ルーブリック参照）

■共通性と一貫性のある取組でなければ、これからの時代に必要な資質・能力を養うことができないことを説明します。

■これからの時代に必要な資質・能力の育成をしていくためにＡＬを実践することを確認します。

■対話による相互作用を中心にしたＡＬがこれからの時代に求められる教育であることを説明します。

■実現のための基盤づくりとして「教師の秘伝」があることを説明します。

■質疑に応答して、新年度より「教師の秘伝」に基づいて取り組むことを確認します。

（注意）「教師の秘伝」は目的ではなく、一貫性と共通性のある取組をするきっかけとして活用することを確認しておきます。

（注意）「教師の秘伝」が達成できたら、教師の個性を発揮した教育を目指すことを共通理解しておきます。あくまでも教師の秘伝は基本です。

（注意）「教師の秘伝」は共通性と一貫性ののある取組としてしばらく継続しますが、活用しながら学校に合う形に変えていくことが大切です。

（注意）「教師の秘伝」の取組を具現化するため、校内研究でとりくむことが必要です。そして「教師の秘伝」に基づいた公開授業を行い、全員が高め合うための協議が行われることが不可欠です。

2．新年度が始まる前に「教師の秘伝」を配布します。

■４月から学校として、「教師の秘伝」を元に共通性と一貫性のある取組をすることを前提に、教師が理解しておくため配布しておきます。

3．校内研究の計画を立てる。（留意点を参考にしてください。）

■新年度が始まる前に、計画や組織・分担を明確にして、新年度が始まったら、すぐに提案できるようにしておきます。組織と分担は、柔軟性と機動性を重視して決定していくと良いです。

4．４月の１日目から、全学級・全教職員が「教師の秘伝」の実践をします。

■毎日の実践が大切なので、互いに授業を見合ったり、学年で相談し合ったりして、取組を進めるように働きかけていきます。（年度末に確認しておくと良いです。）

５．校内研究について全職員に提案して、共通理解を図ります。

■研究の方向性と分担に基づいて、教職員が動けるように体制を作ります。特に、研究授業を行う日程は、今後の変更がないように確実に確認しておくことが必要です。ＰＤＣＡサイクルについては、研究を進めながらじっくり検討（時間をかけすぎない）すると良いと思います。育成していく資質・能力、汎用的な能力・技能、ルーブリック、パフォーマンス評価など、いろいろと検討することはありますが、まず実践して子どもの変容を見ていくことが大切です。研究発表会を予定する場合、この段階で実施することと予定日は確認しておくと、心構えができて良いと思います。

６．校内研究を推進していくための講師を選びます。

■ＡＬを通して汎用的な能力を養う教育について、助言できる人を選びます。形式や知名度だけで選んだり、特定の教科だけに優れている人を選んだりしても、的確な指導や助言ができず、方向性がずれてしまうことがあります。適任と思われる人材が思い当たらない場合は、無理して外部に人材を求めるのではなく、校内だけで進めることにして、校長先生が助言者になったほうが良いと思います。

７．各部会を開き、取組の確認と計画を立てていきます。

■部会のメンバーでじっくり共通理解を図り、取り組む内容と日程を具体化していくことが大切です。計画と日程を具体的にしていくように働きかけていくことも必要です。部会は、柔軟な動きができるようにすることが大切です。

８．研究を進めていきます。

■研究主任や部会のリーダーと校長先生、教頭先生、教務主任の先生など、しっかり連携を図り、一歩一歩確実に高めていく研究にしていきます。研究授業をしたら、「翌日から共通して取り組む何か」が必ず生まれるようにしていくことが大切です。

９．研究発表会を開催します。（開催する場合は、４月の研究計画の提案に入れておきます。）

■無理に発表会を行う必要はありません。

■外部の人に見てもらうことに抵抗を持つ教師もいるかもしれませんが、子ども達が育ってくると、教師も子どもも授業を見てもらうことが励みになります。

■この研究は、ある一単元をどうすれば良いかというものではなく、子ども達にこれまでにどんな力（汎用的な能力）を積み重ねてきたかということが大切です。その場の教師の働きかけや、課題、発問、教材で大きく左右されるものではありません。研究発表会を行う場合は、このことを踏まえておくことが必要です。

『教師の秘伝』活用の留意点

めざす教育（全員参加の活発な相互作用ができる集団作づくり）

■「一人も見捨てない。」みんなでよくなるということが、教師と児童の「学習・生活における価値観」として共有することが基本になります。

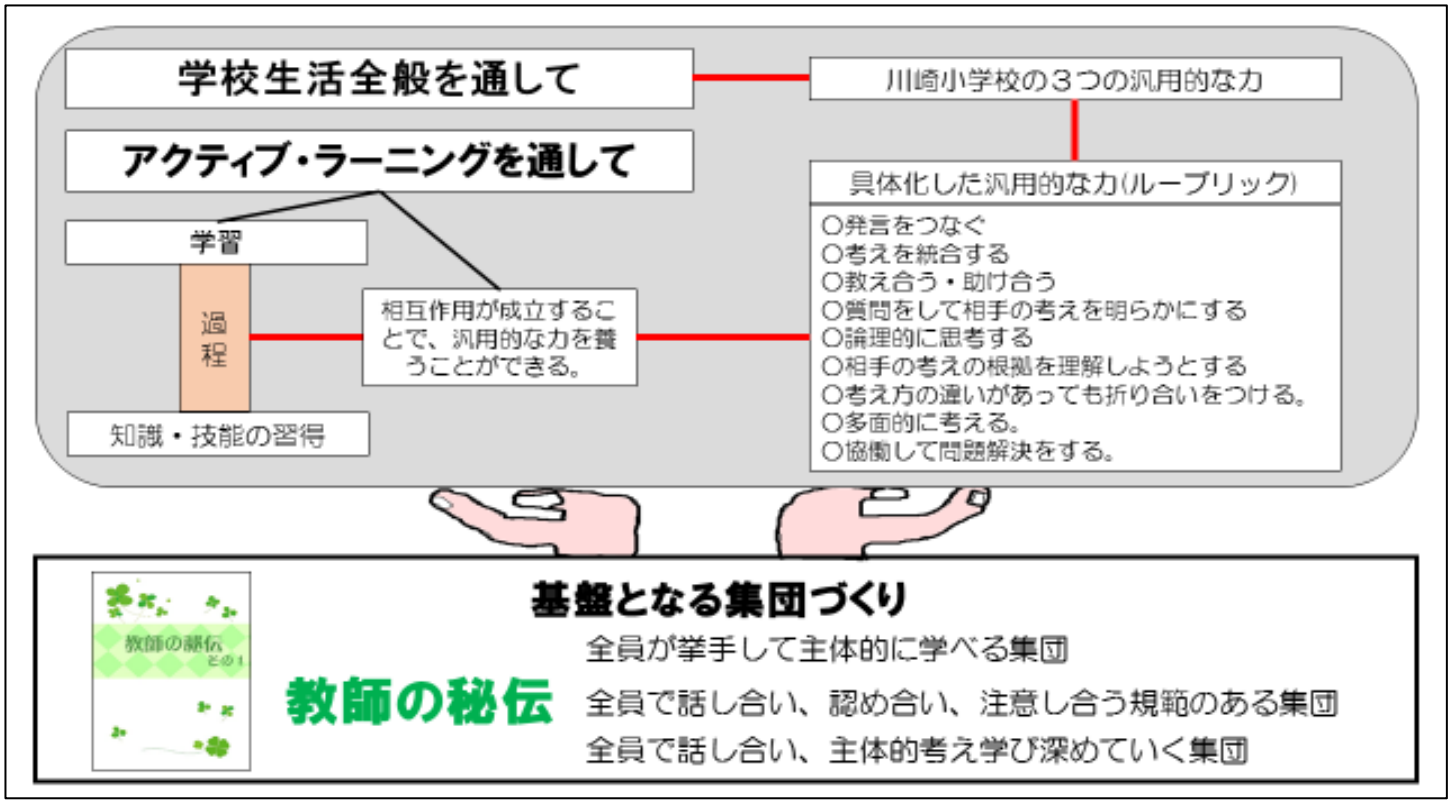
■全員が授業に積極的に参加するため、全員挙手することが基本です。挙手の意義については、秘伝１に詳しく書いていますが、正しく答えられるという意味で挙手するのではなく、自分が考えたことを発言する準備ができましたという意味です。

■挙手以外でも、全員を積極的に授業に参加させる方法があれば、それでもよいと思います。何よりも「一人も見捨てない」ということが大切です。

〔例えば、発言できる児童が立って発言をつなげていく方法では、発言を聴くだけの児童が見過ごされていくということに留意してほしいと思います。〕

■これからの学習は、対話をもとにした相互作用が基本になります。「発言しなくてもあの子は聴いているのだから学習になっている」という考えは認めないことです。この考えは、発言しない子は、見捨てられていくことにつながります。教師が、この子はここまででよいと決めつけてしまうことは、子どもの可能性を否定しています。発言できない子に対してこそ、教師は、しっかり向かい合っていくべきです。この努力ができなければ、秘伝の考え方は成立しません。

■「話し合いで一部の子だけが活躍して、授業が深まったとしても、自分達の学校では意味のあるものではなく、求めるものでもない。」という考えを大切にします。話し合いが深まれば、参加できる児童は当然少なくなりますが、これを念頭に置き、より多くの児童が、「どうすれば対話による相互作用を活発に行い、主体的に学べるようになるか。」という視点を大切にしましょう。



研究体制

■全体会・部会・推進委員会などを組織します。

■全体会は、研究計画の共通理解や研究授業後の協議や重要な点についての共通理解を図るときなど、開催します。臨時でも開けるように柔軟な組織にしておくことも大切です。

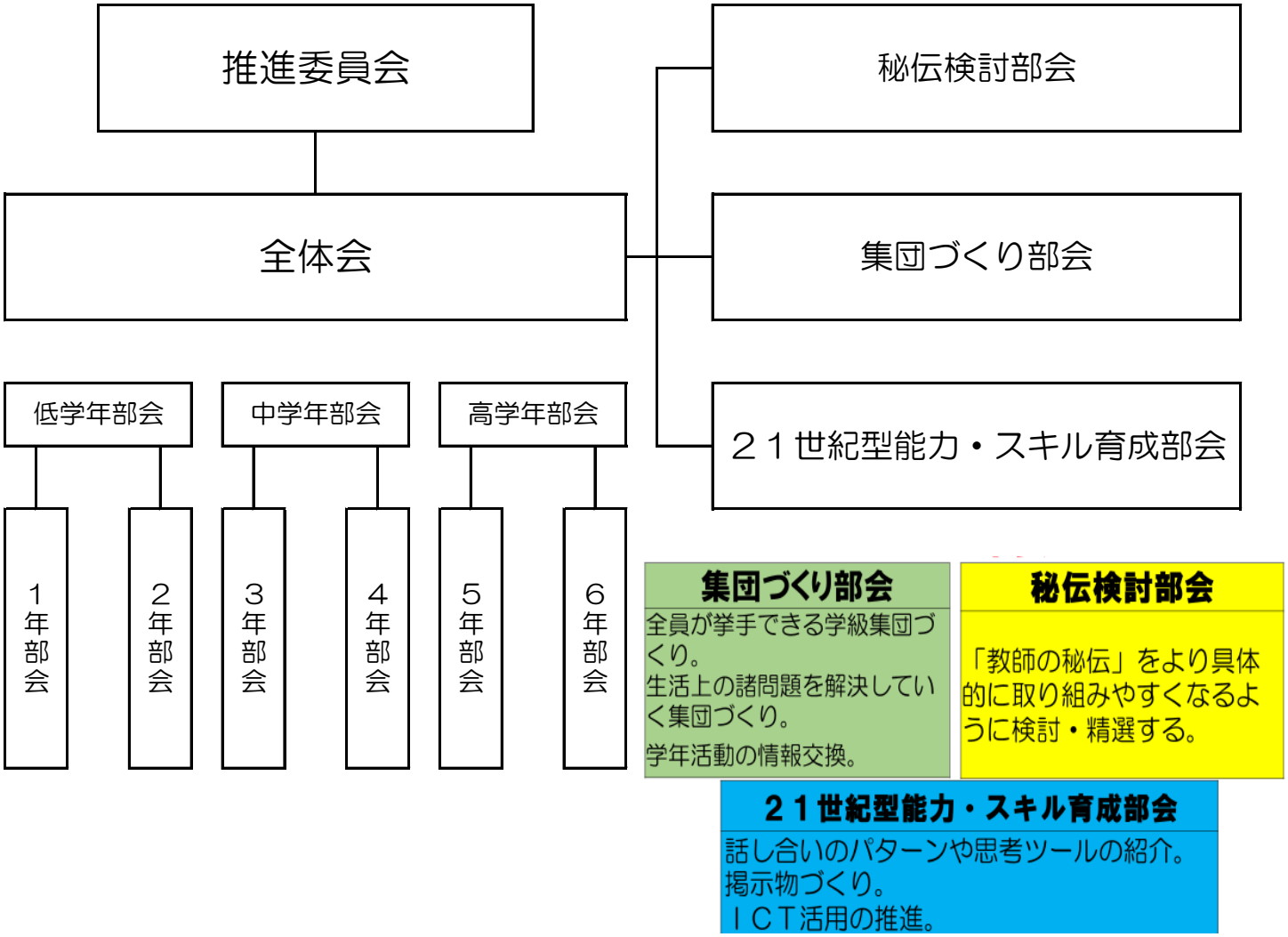
■推進委員会は、研究をどのように進めていくか企画していく組織です。研究の中心的な組織となります。研究主任、校長、教頭、教務主任、各学年からの代表１名ずつで構成しますが、あくまでも例示です。

■部会は、川崎小学校では、「教師の秘伝」部会、２１世紀型スキル(ICT)部会、集団作りの３部会にしました。そして、各学年１人は、３部会に所属するように、学年で分担をしました。

■「教師の秘伝」部会は秘伝の具現化に向けての検討や見直しをします。２１世紀型スキル(ICT)部会は、思考ツールの活用やＩＣＴの活用を推進します。集団づくりの部会は、対話による相互作用が活発になるようにします。

■学年単位で指導案検討したり研究について話し合ったりすることが基本になりますが、低・中・高学年部会をつくり、指導案等の検討ができるようにすると視野も広がります。

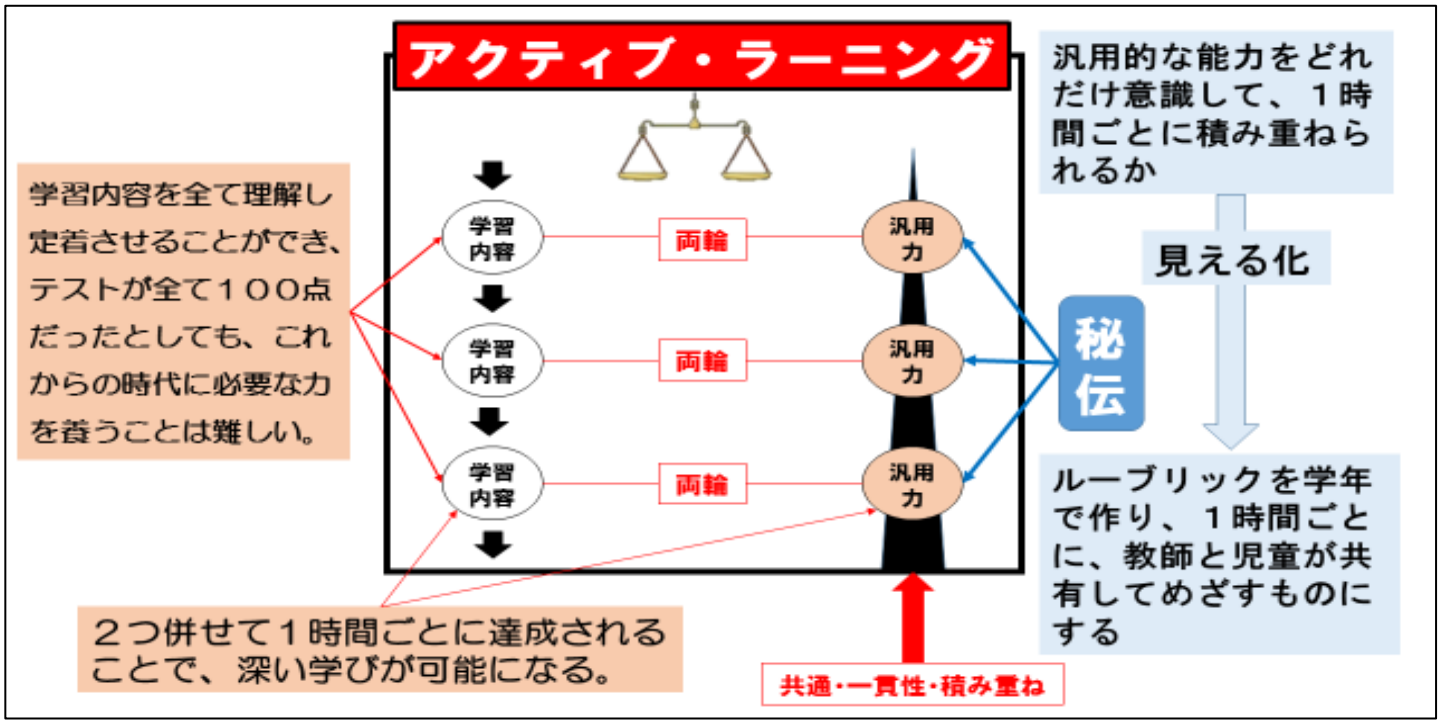
〔組織化例〕あまり複雑にしないことです。



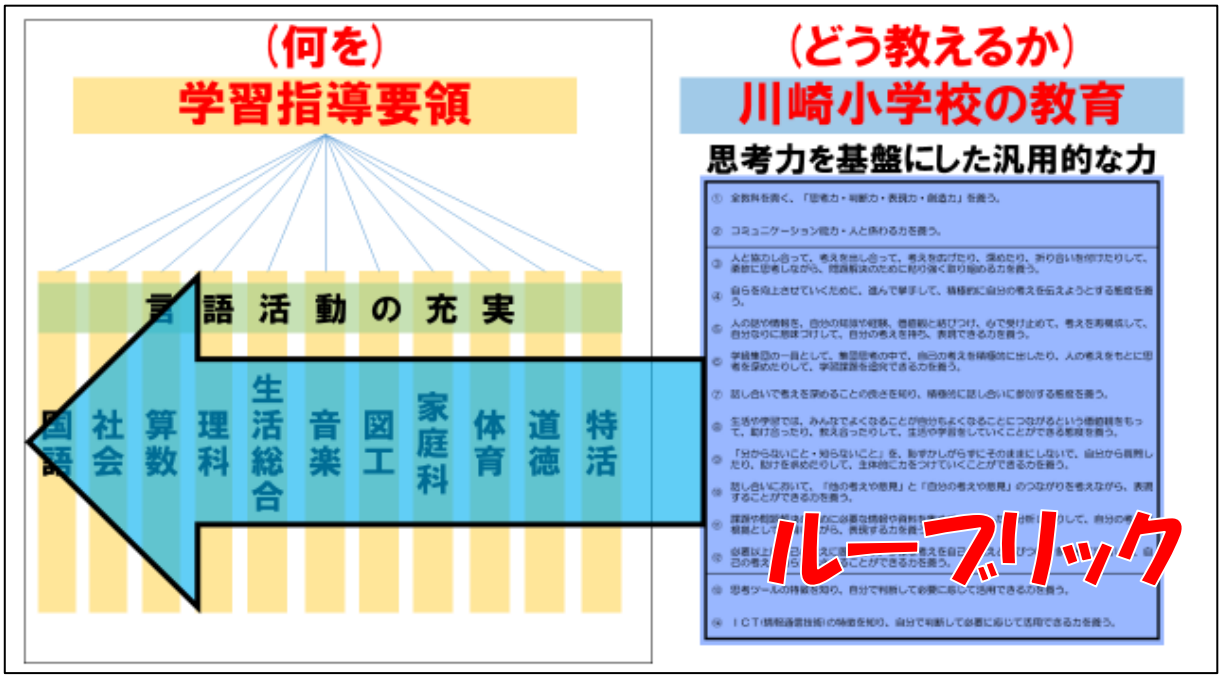
汎用的な能力の育成について（本時の目標達成を重視するの？汎用的な能力の育成を重視するの？）

■思考力を基盤にした汎用的な能力を養うことは、学習指導要領にある思考力・判断力・表現力を養うことにつながっていきます。各教科の特性における力を養うことも大切ですが、ここから始めることは、たいへん難しいことでもあります。教材の工夫、課題の工夫、発問の工夫、１時間の流し方の工夫だけでは、思考力を基盤にした汎用的な力を養うことは困難だからです。対話を中心にした相互作用を通して、学ぶ経験を積んでいくことで、発言をつないで考えを統合していくことができる集団になります。そして、一人一人に思考力を基盤にした汎用的な能力を養っていくことが可能になるのです。

■目標達成と汎用的な能力の育成は車の両輪と同じで、両方不可欠で重要です。汎用的な能力は、学習内容を抜きにしては、養うことはできません。学習内容の質が高ければ、汎用的な能力は高まり、深い学びとなります。但し、研究協議で、本時の目標達成と学習内容の話が中心になってしまっては、従来と変わらず深い学びのあるアクティブ・ラーニングが期待できません。このことに留意して、授業に対する、研究協議をすすめることが大切です。



ルーブリックと資質・能力の育成（汎用的な能力・技能の育成）



（例）川崎小学校で使用しているルーブリック

思考力を基盤にした汎用的な力	番号	『育てたい力』【評価規準・クライテリオン】	●年生 【評価基準・スタンダート】
基礎的・基本的な知識・技能を児童が主体的に習得していき、自分のものとして活用できる ［知識に関するもの］	1	進んで挙手して主体的に学習活動に参加して、知識や技能を確実に習得していく力	各学年ごとに評価規準を作成します
	2	分からないこと・知らないことを恥ずかしがらず、自分から質問したり、助けを求めたりして、主体的に知識や技能を習得していく力	
	3	教え合い、助けあい、支え合いながら、人とのかかわりを通して知識や技能を習得していく力	
	4	新たに獲得した知識や技能を既存の知識や技能と関連付けたり組み合わせたりしながら、学習活動や生活の場面で積極的に活用していく力	
認め合うこと、助け合うこと、教え合うことを重視しながら、多様な考え方、経験、価値観を出し合う話し合いをして、児童自らが思考を広げたり深めたりしながら、新たな知識を創造する力 ［スキルに関するもの］	5	話し合いにおいて、他の人の考え方と自分の考え方の関連性を考えながら、表現する力	
	6	発言内容と発言内容の関連性を捉え、そこから共通点や法則を見いだしたり、法則を適用したりして、論理的に思考していく力【比較・関連・帰納・演繹・両面思考・類推・抽象作用・概念形成・二律背反等】	
	7	話し合いで出された多様な発言を大きくまとめて、まとまり相互の関連性を意味づけるなどして統合していく力	
	8	話し合いを通して統合されたみんなの考えを、自分の知識や経験、価値観と結びつけ、心で受け止めて、自分なりの新たな知識を構成する力	
	9	多面的・多角的に考え、いろいろな考え方があることを理解して多様な考えを認めたり、自分の考えを広げたり深めたりする力	
	10	人と協働して、考えを広げたり、深めたり、折り合いを付けたりして、自己の考えに固執せず柔軟に思考しながら、問題解決に向けて粘り強く取り組む態度	
	11	人と話し合う(対話・議論)ことのすばらしさを知り、積極的に話し合いに参加して、自らの考えを広げたり深めたりしていく態度	
	12	問題の発見や解決に必要な情報を収集して、整理・分析して、目的に応じたまとめ方をして、自分の考えの根拠として活用しながら表現する力	
	13	多様な情報や考え方をつないで、自分なりに意味づけたり新たな知識を構成したりして、創造したことを、生活や生き方に役立てられるような価値あるものにしていく態度　(イノベーションの能力)	
	14	学習問題の解決や自分の目的の達成のために、思考ツールの有効性と特徴を理解し、有効に活用する態度	
	15	ＩＣＴ(情報通信技術)の有効性と特徴を知り、課題追究の学習において、積極的に活用して、自分の考えを深めていく力	
学んだことを自分や生活とのかかわりで捉え、自分の生活や生き方に役立てようとする態度 ［情意に関するもの］	16	［自分をつくる］　学ぶこと・働くこと・生きることの尊さを実感し、学ぶ意欲を持つ　【キャリア在り方生き方教育】	
	17	［みんな一緒に生きている］　共生・協働の精神をもち、共生社会を実現していく力　【キャリア在り方生き方教育】	
	18	［わたしたちのまち川崎］　心のよりどころとしてのふるさと川崎に愛着を持つ　【キャリア在り方生き方教育】	
	19	思いやりや優しさを優先して、教え合い・助け合い・支え合い、人とかかわる良さを感じ取りながら、主体的・協働的な学習ができる力	
	20	生活や学習では、みんなでよくなることで自分もよくなることにつながるという価値観のもとに、助け合ったり教え合ったりして、自らの生活や学び方をよりよくしていく態度	
	21	学習を通して学んだ人とのよりよいかかわり方を、自分の全ての生活で実践して、自分の考え方に生かしたり、自分の生き方に取り入れたりしていく態度	

研究授業

■川崎小学校の場合は、授業研究日は年６回です。（１学年１回）

■４時間目は、半分の学級が公開授業をして、５時間目は、１クラスが提案授業をします。

■４時間目は、全学級のうち半分(ABグループ分けする)が公開授業をします。(指導案は作成)

■４時間目は、自習にして公開授業を参観します。（自習ができないクラスの担任は参観できません。）

■５時間目の提案授業１クラスです。(学年で１クラス決めます)他のクラスは４時間授業です。

■提案授業は、最初から最後まで全員が参観することになっています。

■提案授業が終了したら、代表の先生１人が児童に授業について振り返り(コメント)をして、次への学びと意欲につなげます。（予め推進委員会で誰にするか決めておきます。）

グループ別授業（4校時）	**・A・Bの2グループに分かれて、授業をする日と参観する日を交互にする。** **・低中高学年部会の中で見合うが、他学年を見に行ってもよい。** **・参観者は付箋に気付いたことを書き込み台紙に張っていく。**

提案授業(5校時)	**・学年1クラス提案授業をする。** **（学年で話し合って）** **・授業者は指導計画の形式で指導案と理想案を作成する。** **・教科は全学年、国・社・算・理の中から選ぶ。**
教師からのふりかえり	**・提案授業後、担任以外の教師が児童の前に立ち、良かった点を具体的に児童に話す。**

研究協議の内容と進め方

■ともするとこれまでの研究協議は、教材論や、１時間の流し方、発問や働きかけ、課題の適否となり、たいへん狭い範囲になりがちでした。「こういう発問をすればよかった。」、「このような資料を使うべきだった。」、「課題はこうするべきだった。」など活発な話し合いが行われることもありますが、それらが、次の日から全学年や学級において具体的にどうに生かされていくのか、どう積み重ねられていくのか、確認されることは少なかったように思います。つまり、協議会の内容が転移応用できて、次に直結する力になるということは、あまりなかったということになります。教科という視点で考えると、同じ単元で同じ内容の授業をやるのは、１年後であり、一握りの教師がやるだけです。

■研究授業の在り方を改める必要があるのではないかと考えます。その場限りでなく、次の日から生かされる研究にしなければなりません。そのためには、特に児童の変容に視点を当て、みんなが検証できる研究にする必要があります。

■授業後の研究協議の内容は、本時のねらいの達成に関するものだけではなく、「どのような資質・能力を養うことにつながっているか」という視点から協議が行われるようにする必要があります。

■研究協議は議論にならなければなりません。論点を明確にして、だれでも対等に意見を積み重ねていき、作り上げていくのが議論です。誰かが一方的に話して、分かりましたで終わりにしないで、考えを積み重ねていく話し合いをします。それが相互作用でありＡＬにつながります。教師にもＡＬが必要なのです。

■グループ協議では、「４校時の授業について」、「５校時の授業について」、別々のグループを編成して協議をします。

■グループ協議で出された論点を生かしながら、全体協議を進めます。

■研究協議会の最後に校長の話を入れて、今後に向けての方向性や助言を具体的に示しましょう。これが校長としてのリーダーシップの一つでもあります。研究主任や講師、担当に任せっぱなしにしないことが大切です。

校内研究と教科とＡＬ

■校内研究を１つの教科に絞り込むことは、決して悪いことではありませんが、研究成果が広がりを見せて、全ての教育活動が向上するということは難しいものです。研究内容が変わったり、構成メンバーが代わってしまったりすると、跡形もなくなって、苦労して作った冊子だけが残っているだけということもあります。広がりを見せる研究と、広がりがなく一定の段階で全く跡形もなくなってしまう研究の違いはどこにあるのでしょうか。それは、他の教科や領域、学校生活にも通じる汎用的な能力に着眼できているかどうかなのではないでしょうか。これからの時代に必要に資質・能力を育成するＡＬは、汎用的な能力や技能を育成することを重視しています。汎用的な能力の育成を意識した研究にすることが大切です。

研究に関する便り　（川崎小学校の場合　「川トーク」）

□推進委員会便り等を作成して、「研究協議の結果、翌日から共通して取り組むこと。」「助言の内容で今後につながる重要な事項」「推進委員会からの連絡・確認事項」などを、推進委員が輪番で発行することも、研究を進めていくためには有効です。

平成２７年度　校内研究だより

川トーク

第１号
７月３日（金）

６月２４日（水）の６年生の授業を受け、推進委員会で決まったことを報告します。推進委員の先生を中心に、各学年で進めてみてください。

１　ルーブリックを板書に生かす

これまでは、各クラス学習目標を立てていました。一か月同じ目標ということもあり、子どもたちにはあまり浸透していないという課題が見られました。その時間に子どもたちがどのような汎用的な力をつけるべきか、子どもたちも教員ももっと意識できるように、その時間のルーブリックを板書に書くことになりました。そのため、学習目標はなしになります。

学習課題

しつもんする。

本時で身につけたい汎用的な力を黄色の吹き出しにして、黄色の字で書きます。内容は、各学年のルーブリックを参考にし、端的に分かりやすい言葉にします。
例　生活経験とつなげる
資料をみて話す

２　フリートークを行う

６年生の研究協議でもあったように、話し合いの雰囲気づくりや生活経験とつなげた発言ができるようにフリートークを実践していきます。やり方は各学年で相談してもらい、研究協議や推進委員会の中で実践を報告していきたいと思っています。行っているクラスの例をのせておきますので、参考にしてください。

実践Ｉ　６年　毎朝３分間のフリートーク

① その日の担当（日直など）がテーマを決めて話します。テーマは子どもが考え、授業時間内で内容を考える時間などはとっていないそうです。
② 話の内容をもっと探れるような質問をします。ポイントは１問１答やはいかいいえで答えられるような質問はしないようにします。②の活動から３分間です。
③ 指名などはせず、質問がある人が立って話すようにすることで、３分間の質問タイムでも１０人くらい質問ができるようです。
＊後のパソコン→職員室→研究研修→フリートークに６－３の実践ビデオが入ってます。参考にみて下さい。

実践２　３年

＊時間　朝の１０分間や月曜日の１時間目
＊テーマ　「朝ごはんはパンかごはんか」など、子どもたちの生活に即した課題を事前に伝えておき、自分の考えをもっておきます。子どもたちからテーマを募集することもあります。

その他

＊ハークネスメソット　１２人～１５人のグループに分かれて話し合いをする。
（海外で取り組まれているものだそうです。）

３　算数の行い方

６年２組の研究授業であったように、「わからない子から質問していける算数」を各クラスで実践してみましょう。

４　研究授業の行い方

授業を見る視点を明確にし、より活発な研究協議が行えるように、校内研究授業の行い方を変更します。
①授業を見て気づいたことをふせんにメモします。メモする視点は以下の通りです。
（１）『全員』で話し合い、考えを深めていく集団作りができているか
（２）『全員』が挙手できる学級集団作りできているか
（３）教師の働きかけ（補助発問や板書など）は適切であったか
②授業終了後、ふせんを教室前の視点ごとの紙に貼っていきます。
③当番学年は、研究協議が始まるまでに、ふせんが張られた台紙をグループの数分印刷します。
④４時間目の授業の協議後、ふせんが張られた台紙をもとに各グループで話し合い、全体で共有したい話題を見つけます。

校内研究授業では、当番学年がいます。６年生の授業の時は５年生と、低中高で行っています。当番学年の仕事をのせておきますので、各学年担当の時には準備をお願いします。

授業研の当番学年仕事担当

〈授業〉
★□教室前　ポストイット（一色）
★□視点ごとの台紙（→授業終了後８部印刷します）
□ビデオ　写真

〈研究協議〉
★□ペン
★□川トークふりかえり（四角いポストイットと台紙）
□研究協議司会
□研究協議記録（★記録ノート・板書）

〈研究協議終了後〉
□川トーク印刷・配布
□ビデオ　DVD にする（３枚　校長先生・授業者・山本）
□資料保管（指導案・川トーク・画用紙記録印刷）
２７年度研究記録ファイルへ（松崎先生後ろ棚）
★マークは、研究ボックスに保管しておく

〈その他〉
・研究協議は、最低４人で１グループ（推進が必ず入る）
・理想案を教員分配布する（授業者）

進んで授業を見てもらう

■校内研究での公開授業以外でも、自分なりに工夫して授業をするときは、進んで同僚に参観してもらえるようにしていきます。積極的に授業を見せ合うことが、実質的に高めることにつながります。高まりたいという意識が大切です。

よい授業を児童に見せる

■よい学習ができている学級の授業の様子を児童に見せ、何が良いか説明することも、児童の学ぶ力をつけていくことにつながります。教師ばかりでなく、児童も互いに授業を見せ合うとよいです。

グループ学習について

■グループ活動の場合は、グループで一人一人がどれだけ対話による相互作用ができているかが大切です。グループで意見を集約し、それを全体で発表させて、まとめていくという授業では、子ども達は育ちません。なぜなら、よく考えられる子、強く言う子だけの考えが反映されて、まてめられてしまうことがよくあるからです。グループ単位で、一人一人の発言が大切にされ、考えを練り上げていくというのは、とても難しいことです。しかし、グループを否定するということではありません。自分の考えを出して、それに対する意見をもらい、全体で発言するときの拠り所にできるなど、グループの効果的な活用方法はあります。思考ツールの使い方を定着させていくためには、グループでの思考ツールの活用が効果的です。しかし、最終的には、個人が思考ツールを選んで目的に応じた活用できるようにすることが大切です。

学習の発表会は次の学習の始まり

■発表会をして、学習が終わりでは、発展性がありません。発表は、次の学習へ向けての始まりと考えるべきです。発表後の聞き手の感想や意見が、聞き手全員から出されて、活発な意見の交換(相互作用)ができることが大切です。

■発表会は、一人一人が発表でどのような役割を果たせるかが大切です。グループの考えや自分の思いを出せることが大切です。見栄えや形を優先しないようにしましょう。当日の結果でしなく、発表会までの過程にこそ大切な学びがあるという考えを持つことが大切です。

■発表会は、発表者と聞き手の学習活動を考えたとき、体育館などの舞台で行うより、ポスターセッションやワークショップにして、発表者と聞き手の交流を深めることを目的としたほうが学習としては効果があります。

発表とＩＣＴ活用

■ＡＬではパワーポイントの活用がたいへん有効です。教師や児童が予め学習で使用する写真や資料、図やグラフを取り入れておくことができます。そして、話し合いなどで、自分の考えの拠り所としてすぐに探し出して活用することができます。また、学習のまとめとして発表会をするとき、パワーポイントの資料から、必要なものを選んで、順序立てて発表することも考えられます。その場合、図や資料を作成する時間が短縮できて、発表を充実させるための時間をとれるメリットがあります。

パワーポイントの活用

１年生から６年生まで一貫性と発展性をもたせて活用することで、表現力や思考力を養うための有効なツールとなる。

- 意識して、資料を集める。情報収集を意識する。
- 資料を一定の場所に意識してストックするようになる。
- 写真、動画、データ、図など、多様な情報を使うようになる。
- 集めた資料を、必要性を考え、取捨選択するようになる。
- 資料を活用することで、発言するときは根拠を述べる習慣がつく。
- 集めた資料を相互に関連づけ(思考して)て使えるようになる。
- 資料を使う順序から、自分の発言内容の順序を考える習慣がつく。
- スクロールして、素早く必要な資料を選べるようになる。
- 必要な情報を選んで、自分が伝えたいことを、自分の言葉で伝えられるようになる。
- 自分の考えをまとめる力とプレゼンする力がつく。

全ての教育活動を通して行う「話の聴き方」

■聴き方の指導は、汎用的な能力として、全ての教育活動において積み重ねていくことが大切です。毎日の授業はもちろん、朝会、行事、特別活動で、話の聴き方の指導を積み重ねることです。　自分が（教師）が児童に何か伝えるときも、伝えることだけを目的とするのではなく、同時に話の聴き方を指導するということも意識して、積み重ねていくことが大切です。

聴き方上手の集団づくり

話して気持ちよいと感じられる集団は、話し手を育てる集団

- ■優れた聞き手が、優れた話し手を育てる。
- ■話し手を緊張させ、話せなくしてしまうのは、聞き手。
- ■話す人がもっと話したくなるような、聴き方を身に付ける。

聴き方上手

①目を見て聴く。
②うなずく。
③あいづちを必ず声に出す。

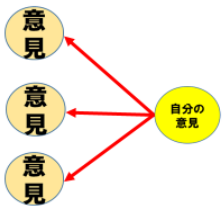
話し合いは議論

■発言が活発でも、発言の内容につながりがなくて羅列されていくだけでは、深まりのある思考はできません。また、発言が羅列されたものを、気の利いた子がまとめて終わってしまう学習でも思考は深まりません。つまり、「活動あって学びなし」となってしまうということです。

■発言をつなげ、論理的に積み重ね、考えを統合していく過程を経験して、思考力を養っていくことは、汎用的な能力を養うために最も重要です。教師として、「論理的な思考とは」、「考えを統合していくとは」、常に考え試行錯誤しながら授業を実践していくことが、より深いＡＬを可能にします。

さらに深い論理的な思考

３人以上の意見をつなげる



比較・関連

ＡさんとＢさんにつけたしで、Ｃさんには反対です。

さらに意味づけ

ＡさんＢさんＣさの発言から…と言えます。

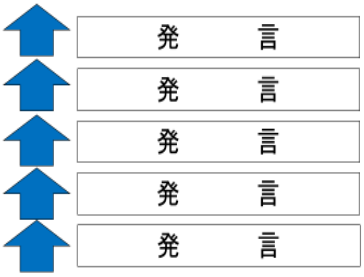
帰納・演繹・推論
二律背反・抽象

意見をつなげる方法【思考する方法】

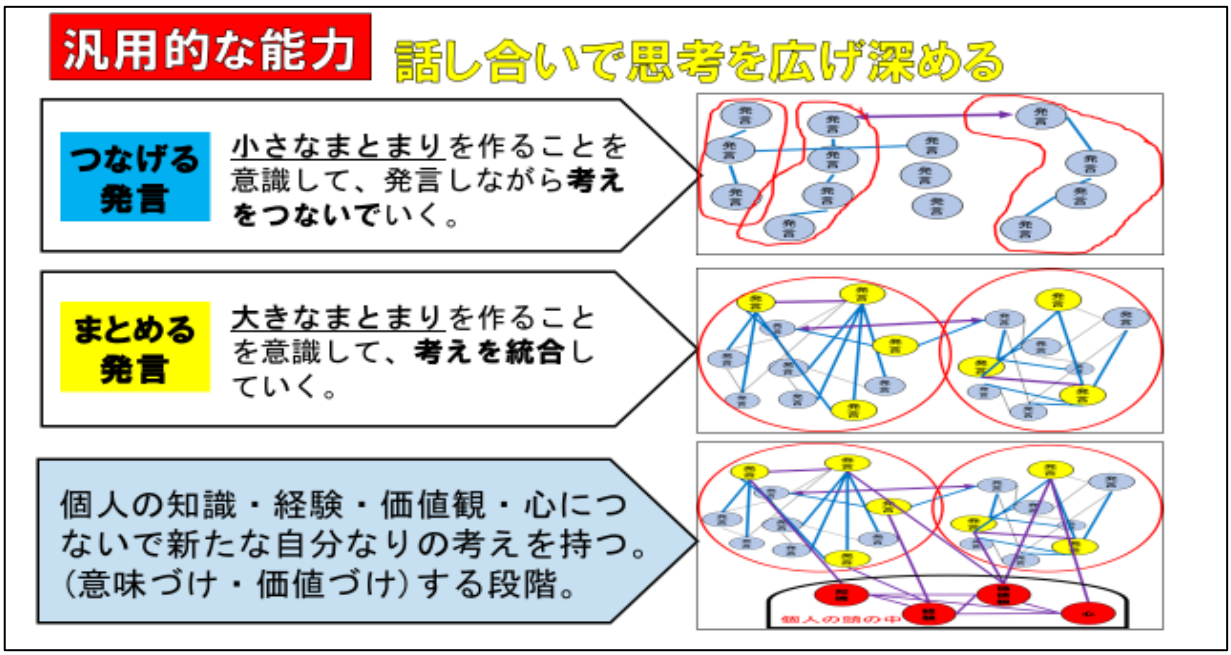
比較・関連	級友の発言と発言、またはそれらと自分の発言を比較・関連させて、意味づけすることです。（〇〇さんと同じで■■です。〇〇さんには反対で■■です。〇〇さんにつけたしで■■です。同じです。）
帰納法	発言ＡＢＣの共通点に着目し、こんなことが言える（法則）ということを導き出し、判断するような場面や論点を作ることです。「人間Ａは言葉を使う。人間Ｂは言葉を使う。人間Ｃは言葉を使う。ＡもＢもＣも言葉を使う。人間は言葉を使う。」
演繹法	発言Ａを、一般的な原理に当てはめて説明することです。（前提が事実かどうかが重要になります。）（三段論法が代表になります）「すべての鳥は空を飛ぶ。スズメは鳥である。ゆえにスズメは空を飛ぶ。」
弁証法	２つの対立する考え方について話し合い、中間ではなく、新たな考えを導き出し、判断することです。
両面思考	事例Ａを一面的にとらえず、プラス面、マイナス面から見ていくことです。
多面的思考	事例Ａを、話し合いで、いろいろな角度から自由に見ていくことです。

汎用的な能力　話し合い考えを深める

学　習　課　題



学習課題の解決に向けて自分達の考えをつなげて積み重ねていくことが大切です。

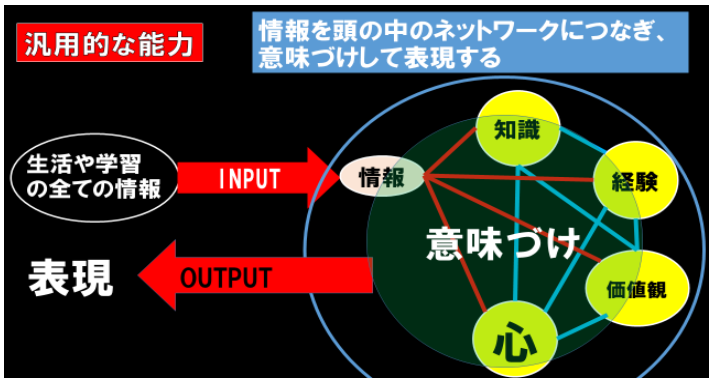


対話をもとにした相互作用による学び

■これからの時代に向けた資質・能力を育成するためには、対話による相互作用を通して、資質・能力を育成するＡＬが重要になります。相互作用は、人とのかかわりから学ぶものであり、相互に情報をやりとりしながら自分の考えを深めていけることが基本になります。そのためには、「きちんとした議論ができる。」「相手の考えを理解しようとする。」「自分の考えを伝えられる。」「折り合いをつけられる。」「相手を思いやる。」などの汎用的な能力や技能が必要になります。

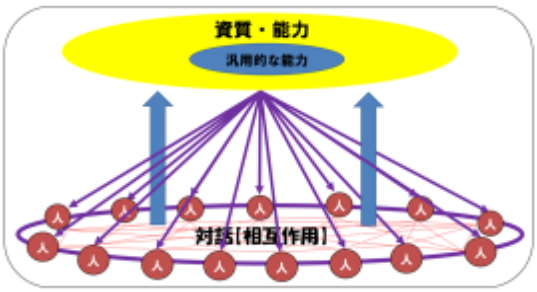
相互作用＝対話＝話し合い（議論）

話し合いは、発言をつなぎ、考えを統合して、一人一人が知識を自分のものとして、新たに知識を構成していくことを目指します。



汎用的な能力を育成するには

毎日の授業はもちろんすべての教育活動を通して、学校として、意図的にALの学び方を積み重ねていく



【重要】一人も見捨てないことで相互作用を活性化させて、そのエネルギーを主体的な学びにつなげる。

【重要】能力差はあっても、教える教わる関係は、いずれ対等の関係になっていく。

留意事項

■研究の組織は、これまでの形式にはこだわらず、柔軟に動ける組織づくりをします。

■必要な文書は作成しますが、あまり活用されない冊子は作成する必要はありません。

■対話をもとにした相互作用を生かして、資質・能力(汎用的な能力)を育成すること、つまりＡＬを中心にした研究にします。

■研究を始めた当初は、教科についての話し合いより、汎用的な能力の育成を中心にした協議ができるようにします。「この課題は」、「この発問は」、「この教材は」、「この資料は」など１時間レベルの話し合いだけではなく、この学習を通して、子ども達に、「どのような汎用的な能力を育成するべきだったか」、「これまでに養ってきた汎用的な能力は生かされていたか」、「これからはどんな汎用的な能力を養っていくことが必要か」、「対話による相互作用は活性化していたか」等を大切にします。

■指導案は、枚数を少なくして、教師が単元の構成や構造化の学びが見える形式にします。

■提案授業については、本時の理想の流れの案を作成して、それをもとに検討します。授業者の板書や最終的なねらいを、具体的に理解していくためです。

■「学習目標の達成」と「汎用的な能力の育成」は車の両輪と同じで、学習内容がなければ、汎用的な能力の育成はできません。しかしながら、この研究に着手して１～３年は、意図的に汎用的な能力の育成を協議の話題の中心にすることが大切です。

■ルーブリック（評価計画表）を作成して、育てたい資質・能力を明確にします。それを受けて、各学年ごとに、養うべき汎用的な能力・技能を具体的にして、授業や全ての教育活動を通して、育成していきます。

■汎用的な能力や技能は、継続することで養うことが可能になりますが、実社会や生活とのつながりを重視して、「何ができるようになるか」を意識しながら設定するようにします。

■例えば、低学年・中学年・高学年では、育成する資質・能力はここまでという区切りをつけるのではなく、小学校で最終的に育成したい資質・能力(ゴール)を踏まえ、各学年ごとに、取組を実践しながら、設定と見直しを繰り返していくと良いと思います。

形式から入ったものは、いつまでも続けるのか。

■相互指名、ハンドサイン、話型などの形式から入っているものは、本来の目的を達成できたり、違う形のものがよいと判断できたりした場合は、見直すことも必要になります。但し、見直しの根拠は明確にしておくことが大切です。

■例えば、相互指名は「次を指名するまで時間がかかりすぎる」、「特定の児童が指名されることが多くなってしまう」など、機能するまでは問題が出てきます。このような欠点があるので、「やりません」では進歩がありません。このような欠点は、教師の働きかけ次第で簡単に克服できます。子どもに任せっぱなしだと起こる問題です。教師が指名したり、児童の立場になって挙手して発言することも必要です。相互指名は、自分達で話し合いを進めていくことができるメリットがあることを忘れないようにします。

■「相互指名は、必要ない。」「ハンドサインは必要ない。」「話型は必要ない。」などの短絡的な教師の考えは、受け入れないようにします。

秘伝活用後の児童の変容

■秘伝をもとにした取り組みを開始すると、短期間で子ども達の変化が現れます。全員が主体的に授業に参加できるようになり、集団としての士気が高まり、学級集団としてのまとまりが出てきます。児童は、進んで教え合ったり、助け合ったり、話をよく聴いたり、プラスの方向への循環が開始します。教師は、授業をやっていても、その他の指導をしていても、児童が話を良く聴いて、考えるようになるので、いろいろな場面で児童の良さを発見できるようになり、教師としての喜びと充実感を得られるようになってきます。

教　師　の　秘　伝　の　効　果

■学習や物事に**主体的**に取り組むようになってくる。

■**思考力**・判断力・表現力に向上してくる。

■**人とかかわり**ながら学ぶことが自然になってくる。

■**助け合いや思いやり**のある言動が増えてくる。

■**いじめ・暴力・仲間はずれ**はなくなってくる。

■自分と異なるいろいろな考え方を認めようとする。

■自然に話し合いができるようになる。

フリートーキングの導入（実社会・実生活とのかかわり）

ＡＬを通して養う汎用的な能力や技能は、実社会や実生活で活用できるものでなければなりません。そのためには、ＡＬを深い学びにするため、自分の生活や経験と関連づけて考えをまとめたり、発言したりできるようになることも不可欠です。フォーマルな発言ばかりでなく、インフォーマルな個別の経験に基づく発言も気軽に出し合えるようにすることが大切です。このような話し合いを可能にする手段として、「フリートーキング」が考えられるということです。自分の生活の中でみんなに伝いたいことを考え発表して、それをもとにクラスで話し合うという活動を日常化することです。川崎小学校でも、ご指導いただいている上智大学の奈須先生の助言により、平成２７年度より取り入れています。この効果が少しずつ出始めて、授業でも、児童は生活経験に関連づけたり、生活とのつながりを意識したりしながら自分なりの考えを出すことが見られるようになってきました。このことが定着していくと、学んだことを自分の生活や生き方に取り入れ、実践できるようになることが期待できるのだと思います。

教材研究の進め方

■ひとつの例を以下に示しますが、学習指導要領の解説書(文部科学省)と他社の教科書(使用している教科書以外の会社で作っている教科書)は、学校で揃えておきたいと思います。

単元の作り方の研修資料

1. 準備するもの(研修会資料)

①文部科学省の『小学校学習指導要領解説(●●編)』
②国立教育政策研究所の『評価規準の作成のための参考資料(小学校)』
③教科書会社の『指導書』と『教科書』
④単元のねらいに関連する資料・参考書・他社教科書等

2. 単元をつくる手順

①小学校学習指導要領解説を読んで目標と内容を確認し、何を指導することが大切なのかを自分で理解する。

↓

②『指導書』と『教科書』を読んで、指導の具体例・概要を知る。(あくまでも一つの例として受け止める)

↓

③単元の目標を設定する。【小学校学習指導要領解説を基盤にしながら】

↓

④単元の観点別の目標を設定する。【評価規準の作成のための参考資料(小学校)を基盤にする】

↓

⑤単元の目標を達成するための1時間レベルでの必要な指導内容(本時目標・本時の主な活動・本時の評価規準)を考える。〔単元の構成〕【『指導書』と『教科書』資料・参考書・他社教科書等を参考にしながら考える】
《重要》本校の教育の重点の話し合いの場面の設定を重視する。

↓

⑥指導内容の順序を、「児童の実態」と「児童の意識の流れ」を想定して、決定する。〔単元の構造化〕＝指導計画
【学習課題を明確にしながら1時間の中の活動とその順序も決定する。】

↓

⑦学習に必要な、道具・用具・材料・資料等の準備をする。

↓

⑧学習指導の実践

↓

⑨実践後、計画の修正等をして、次年度に活用できるように保管する。

↓

〔社会科の例〕

単元名

単元目標

社会的事象への関心.意欲.態度	社会的な思考.判断.表現	観察.資料活用の技能	社会的事象についての知識.理解
1時間レベル 学習内容	1時間レベル 学習内容	1時間レベル 学習内容	1時間レベル 学習内容	1時間レベル 学習内容	1時間レベル 学習内容

↓

〔指導計画〕

1	学習課題 ① 学習活動 ② 学習活動 ③ 学習活動	3	学習課題 ① 学習活動 ② 学習活動 ③ 学習活動	5	学習課題 ① 学習活動 ② 学習活動 ③ 学習活動
2	学習課題 ① 学習活動 ② 学習活動 ③ 学習活動	4	学習課題 ① 学習活動 ② 学習活動 ③ 学習活動	6	学習課題 ① 学習活動 ② 学習活動 ③ 学習活動